

著名な「同盟通信社」出身のジャーナリスト。松本を補佐した前田陽一は第二次大戦中、パリに留まり外務省業務に従事した学究でもあった。会館の理事・瀧良精には、按ずるにこの二人の影が宿っているようだ。題名の「球形」に目立つ注記はない。だが全球global時代を見越す清張の先見の明は明らかだ。

原作から半世紀の時間差を生かしつつ、当代中国の松鷹の『杏焼紅』（2008）は「清張に匹敵する社会推理小説」との売り文句を掲げ、蔡駿は『生死河』（2013）を清張に捧げている。

＊王成「越境する「大衆文学」の力——なぜ中国で松本清張が流行するのか」国際文化会館、2014年12月11日、日文研I-House連携フォーラム席上での筆者のコメントを母体とする。

連載151  
中国の松本清張ブームに  
日中文化交流の将来を  
探る

王成教授講演「越境する「大衆文学」の力：なぜ中国で松本清張が流行するのか」から（下）

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学教授  
稲賀繁美

（承前）そのなかで『球形の荒野』（1962）翻訳史は注目に値する。終戦秘密工作に従事した外交官の数奇な運命を縦糸とする物語は、まず『重重迷霧』（1987）との題名で中国語訳されるが、2011年には『一個背叛日本的日本人』と題名を改めて出版される。「日本を裏切った日本人」という反日の時局向きの表紙には、日本刀を突き通されて血を流す日の丸が描かれている。加瀬俊一によれば、野上頭一郎のモデルはベルン駐在武官・藤村義一（戦後、義朗と改名）らしいが、加瀬はまた清張の設定は歴史的には無理だ、とも釘を刺している。読者もご承知のとおり、この作品には「世界文化会館」なる施設が登場するが、これは他ならぬ六本木の国際文化会館I-House。その創設者、松本重治は『上海時代』で